



今月の御聖訓



爪上の土よりもすくなし
地微塵よりも多、正法をへたらん人は
ばうじて、無間地獄に墮べきものは大
末法に入って仏法を

爪上の土よりもすくなし
地微塵よりも多、正法をへたらん人は
ばうじて、無間地獄に墮べきものは大
末法に入って仏法を

【三三歳祈雨事 一四七一頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
お講講話 「大聖人のご消息にみる慈悲」	菅野憲道 2
箴点 「正本堂が取り壊しへ!!」	8
家を守る話〔その六〕	松井照雄 10
天地つかの間〔その㊦〕	成田詳道 12
合同地区総会特集 〔後編〕	13
【所感発表】「自分から求める信心を」	寺川春美 14
「悩み・苦しみこそが原動力」	藤岡真智子 15
「法統相統」	黒岩直子 17
読書案内『まどさん』	松田銘道 19
恵目だより	20
【入講者代表挨拶】「ご指導を賜りながら」	藤田忠省 21
五月の行事 皁月詠草 訃報	

巻頭言

歴史の審判

菅野 憲道



正本堂から戒壇本尊を奉安殿に遷座したというニュースが伝わってきたと思ったら、今度は正本堂を解体することに決したという……。驚くと同時に、常軌を逸した阿部宗門のやり方をつくづく認識させられた。その上、奉安堂なる代りの建物を造ろうというのであるから、ここに至ってはもはや狂気の沙汰と評する他はない。

この愚行は日蓮正宗・創価学会の戦後五十年間の歩みを自己否定するものに他ならないのであり、阿部氏ら宗門執行部によって推進された教義・政策の失敗と誤りは、これによって、いっそう明確になったのである。ところがうかつにも、彼らはこの自己撞着にすら気づいていないのであるから、お気の毒というほかはない。

今までもそうである。正信会を擯斥追放し、池田創価学会を称賛したかと思うと、本門寺改称・広布達成の尻馬に乗り、その夢が破綻したら一転して池田破門・学会破門。まったく短慮というか、無責任というか、厚顔無恥な人々である。

いままた、宗門の根本教義にかかわる戒壇問題を、法義にふれることもなく、手のひらを返したように翻し、何の説明もなしに一片の通達で変更するのであるから、こうした独善的な指導者がいる限り、問題解決どころか、宗門と学会は今後もますます混乱が深まることになろう。だいたい数年先も見えないような迷走貫首や迷世会長がもっともらしく三世を説き、生死一大事の仏法を云々することがおこがましいのではなからうか。

いつの時代でも、先の見えない中心者はいるものである。そしてこれに追従する取り巻き連が出来て、強い指導性を発揮すると、大衆をミスリードし大きな悲劇をもたらすことになる……。

私どもは宗祖日蓮大聖人を本師と仰ぎ、日興上人を手継ぎの師として法華経の信心をするものである。彼らの姿に紛動されて、己れが進むべき道を見失わないよう、ともどもに自戒したいものである。歴史の審判ははや明らかである。

お講講話(要旨)

拝読御書 「上野殿母尼御前御返事」(全集一五八三頁)

大聖人のご消息にみえる慈悲

菅野憲道

《大聖人の心情を綴られたご消息》

この御書は、弘安四年の十二月八日、前年に子息を亡くされた駿河の南条時光のお母さんに宛てて、雪深い身延の山中より出されたご消息であります。

弘安四年とは、大聖人が亡くなられる前年ですが、この御書には、ご自身の健康の状態を、

「ただし八年が間やせまいと申し、とし(齡)と申し、としどしに身ゆわく、こころをほれ候ひつるほどに……」

(全集一五八三頁)

と、身延に入られてから、次第に体調が悪化し食物も喉を通らなくなってきた様子が記されております。痛だったのではとの説もあるようですが、どうやら消化器系の疾患に罹られて、次第に痩せ衰えられていたようです。そしてそのことから、

「これもよもひさしくもこのよに候はじ、一定五郎殿にいきあいぬとをばへ候。母よりさきにけさんし候はば、母のなげき申しつたへ候はん。」(同一五八四頁)

と、自分の死期がそう遠くないことを感じられていた大聖人は、

「自分も遠からず死ぬことになるでしょうから、あなたよりも先に亡くなった息子さん(五郎殿)にお会いして、あなたの嘆き・悲しみをそのまま息子さんに伝えるようにしましょう」とまで言われております。

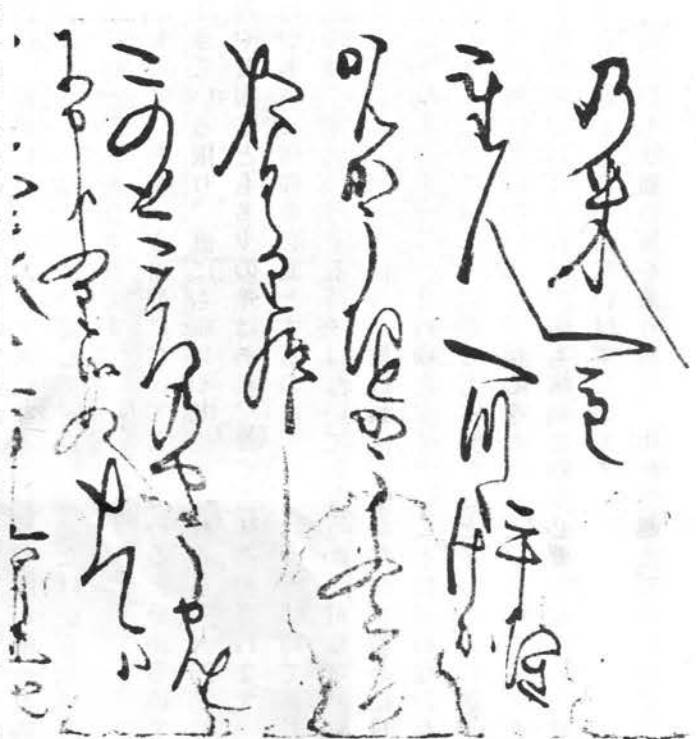
この御書では、冒頭にご供養の品々が挙げられて、どこからか大聖人のご病状を聞き及んだ南条母尼が、お米と一緒にお酒と漢方の薬にもなる藿香の葉を送られたことが記されております。それを受けて大聖人は、

「しかるにこのさけ(酒)はたたかにさしわかして、かつかうをはたたくい切て、一度のみて候へば、火を胸にたくがごとし、ゆ(湯)に入るにいたり。あせ(汗)にあかあらい、しづくに足をすすぐ。此の御志はいかんがせんとうれしくをもひ候ところ、両眼よりひとつのなんだをうかべて候。」

(同一五八三頁)

と、じつにその心境や光景をまざまざと描写されておられますが、このように、七百年の歳月を経てなお生き生きと語りかけてくるような消息や手紙を、私はまず読んだことがあります。

この時の大聖人は寒々とした冬の身延山中で、病床に臥せて



「上野殿母尼午前御返事」の冒頭

おられ、身も心も冷え切っておられた背景を思えば、このお文字の一つ一つに、大聖人の心が宿っているのであります。この母尼の心遣いに応え、心から感謝されたことを、そのまま何のためらいもなく表現されているのであります。

そして、そのような心情の吐露から一転して、今度は母尼に對して、

「去年の九月五日ご五郎殿のかくれにしはいかになりけると、胸うちさわぎで、ゆび(指)ををりかずへ候へば、すでに二ヶ年十六月四百余日にすぎ候か……余所にてもよきくわんざ(冠者)かな、よきくわんざかな、玉のやうなる男かな男かな、いくせをやのうれしさをぼすらむとみ候ひしに、満月に雲の

かかれるがはれずして山へ入り、さかんなる花のあやなくかぜのちらせるがごとしと、あさましくこそをぼへ候へ(同)と、昨年九月、子息の五郎さんが亡くなったことはいまだに信じられない。その後どうしているのだろうかと振り返ってみると、はや二年、月数にすれば十六カ月、日数にすれば四百余日も過ぎてしまいました。周りの他人でさえ立派な若者、本当に好青年だと頼もしく思うような人だったから、まして母親にすればそれをどれほどうれしくも思い、頼みにもしていたことでしょう。しかるに満月に雲がかかったまま山に入ってしまうような、またちようど満開になりかかった花が急に嵐で散ってしまったような、まことに味気なく、情けなく、がっかりすることです、と述べられています。

この五郎は大愛好青年で、兄時光とともに前年六月に大聖人のもとへ詣でられて直接お目にかかっていたこともあり、南条家関係に宛てられた消息の中には、五郎のことが記されたものが他にも八篇も残っております。たとえば、

「五郎殿はとし十六歳、心ね、みめかたち(容貌)、人にすぐれて候ひし上、男ののう(能)そなわりて、万人にほめられ候」
(全集一五七六頁)

「あわれ肝あるものかな、男や男や」(同一五六七頁)等とあります。すなわち大聖人ご自身もこの兄弟に對しては、大きな期待を寄せられていたものと思われ、五郎の死は母尼の嘆きであると同時に、そのまま大聖人ご自身の嘆きでもあったのです。そしてこれほど上野殿母子に對して、大聖人が心を寄せられていたのは、それだけこの親子が真っ直ぐで純粹な信心を貫かれていたからであります。

《ストレートな病状の記述》

ところで法華經に「現世安穩 後生善処」とあることから、学会や宗門の信仰観では、この信心をしたら宿命転換して、病氣もせず、経済的にも成功し、長生きできるという体験談になるのですが、大聖人の御書にはそういうことはあまり出てこず、むしろ逆に多くの難にあうことも書かれています。

もし功德ということをも、単に現世の名聞名利、地位や財産や健康といったものに求めていたならば、この御書の内容などは都合の悪いことばかりではないかと思えます。

そのため学会などでは、幹部が病気で入院したなどということとは、組織にとってマイナスになるという判断が働くため、都合の悪いことは一切覆い隠して、良いことだけを宣伝するやり方になってしまっています。

しかし、ちょっと冷静になって考えてみると分かるのですが、生きている限り、誰にも病気や老化が訪れるし、人間関係の悩みや貧困なども多少の差はあれ、誰でも味あわされます。我われが本当に信仰を必要とするのは、そういう辛い時であり、生死の瀬戸際に呻吟する時ではないでしょうか。健康で、経済的にも恵まれ、何一つ悩みが無ければ、なかなか宗教心に目覚めることはありません。それゆえ、イヤなことと遇わないために信心をするのではなく、誰でもイヤなこと辛いことに遇うからこそ、難に負けないよう、信心をしようというのです。だから正直に信心していれば、何も病気を隠す必要もないし、貧しいことを恥じることもないはずなのです。

幾たびも法難の嵐を乗り越え、生死を越えてきたはずの大聖

人が、これほど五郎の死を惜しまれ、悲しまれていることは、重く見なければならぬことだろうと思えます。そして母親に對しても、けして安易な慰めを言うのではなく、むしろともに深く嘆き悲しまれているところに、いかにその共感同苦する心の深さ、人情の深さを知るのであります。

要するに、我われ末法において智慧もなく、善業もない凡夫が、法華經というものをどのよう血肉化し信仰していくのかということが、このお姿に示されているような気がするのであります。

《仮名書きの消息に込められたもの》

多くの仏典は、哲学的に深い悟りを示したり、存在や認識とということについて極めて徹底した見方をしているものが多いのであります。けれども、そういうものは思想的には高度なのかも知れませんが、往々にして難解かつ非日常的な観念であって、生きた人間の救いという現実の前には無力なものに過ぎないのではないかと思っております。

また空海や道元や法然がいかにすぐれているのか知りませんが、そのような高僧・名僧といわれる仏教者の中に、ついぞこのような血の通った言葉を聞かないのは、非常に矛盾しているのではないかと思えます。

それに対して大聖人の御書には、その一つ一つに、大聖人の息づかいすら聞こえてくるような、お姿が浮かび上がってくるようなご消息が多いのであります。それもごく普通の生活実感にあふれ、日常座辺の世界に、法華經の信仰というものが貫かれている御書がたくさん残されているのであります。ここに本

当の法華経の信仰があるし、また本仏のご慈悲もあると思うのであります。

ところで、従来仏教は一部の選ばれた知識人によって担われてきましたから、書物はほとんど漢文で書かれ、教義的に難解なものが多いのですが、大聖人においては、一貫して仮名書きで記され、ご消息（お手紙）という形を取っており、またその数の多さも他に例を見ないのであります。こうした在俗の信徒の方がたに宛てられた仮名消息を、五老僧方はそれらは方便の教えとして軽視し、後世に残すことは恥になるから処分すべきだという考え方を持っていました。

それに対して、末法の法華経の行者の教えは、末法は一切衆生の成仏得道の大導師であり、そのお振る舞いや、ご消息の一文一句によってそれを示されたのであるから、これこそ末法の法華経として、御書をそっくり残されてきたのが日興上人なのであります。

また、いろんな文学者が指摘していることですが、大聖人の御消息はあらゆる法語文学（仏教文学）の中において、最も先に挙げられるべきものだと言われております。

例えば中野孝次なども、この数年来大聖人のご消息に着目して、「自分は今まで日蓮という人を理解できなくて、食わず嫌いであった。評判からいえば他宗の悪口を言って自分の主張だけをしていると思っていたが、実際にお手紙を読んでも自分の理解は間違っていた」「これほど心のこもったお手紙を書けるような人間が、一体この世の中にいたのだろうか。歴史の中にこれほど素晴らしい消息を書いた宗教家や文学者がいたのだろうか」というようなことを書かれております。

中野孝次

君の死生観

生きて今 あるということ

死を見つめることによって
生が見えてくる。
清貧に生きることで
本当の人生が見えてくる。

現代人が見失った人間らしい「生き方の規範」
「君の死生観」は、これこそ、現代人の

共苦の素晴らしさを指摘する著書

かようなご消息も、その人格に裏付けられているのですが、そのご消息に現れた深い人情味、豊かな心が、大聖人の法華経信仰から発してい

ることはいまさら論ずるまでも無いと思います。

《本当の慈悲とエゴ》

話は変わりますが、この前、オウム真理教事件の裁判で、林郁夫被告が無期懲役の求刑を受けました。その時、新聞などで林被告が真相を告白することになった改心のきっかけを報じていました。オウム真理教の事件は、この自白によって一挙に真相解明が進んだので、自首に等しいものといわれています。

それによれば、林被告が逃亡生活から追いつめられ、最後に自殺しようと思った時に、このまま黙って人にも知られず死んでしまったら、家族が可哀想だ、自分も死んでも死に切れない、せめて家族あての遺書だけでも書いて死のうと思ったそうなんです。そして遺書を書こうペンをとっているうち、ふとサリンの犠牲になって死んだ人たちのことを思ったといいます。彼らは遺書も書けないで死んでしまった、家族に何も言い残せず突然命を奪われた、自分はまだこうして遺書を残せるだけましだ。とすればどんなにか無念だったろうと思ったそうです。そ

止むに止まれぬ慈悲の発露であることを、我われはしっかりと捉えていかなければならないと思います。

親が子を思うが故、子が危ないことや愚かなことで自ら苦しんでいれば、親も一緒に苦しむものです。そして子供を叱ったり、鞭を打つても改めさせようというのが親心であると思います。

そういうことが、例えば「諫曉八幡抄」に、涅槃經の「一切衆生異の苦を受くるは悉く是れ如来一人の苦なり」を引かれて、「日蓮云く、一切衆生の同一苦は悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし。」(全集五八七頁)

と仰せられるように、大聖人が一切衆生の父母として、我が子の苦しみは見捨ててはおけないという慈悲から出発しているのは、大変重要な点であります。

このような宗教的な契機は、法然や親鸞あるいは道元といった他の祖師達の宗教的な契機とは随分違うのであります。

《共感する心の発露としての慈悲》

いずれにしましても、慈悲というものは、他人ないしは一切衆生に対するシンパシー(共鳴・共感する心・同苦する心)というものがあって、初めて生まれてくるのであります。ちょうどお医者さんが、どういう病気で、どういう症状があり、何故起こってきたのか、ということがわからなければ、それを取り除くことができないのと同じことで、我われが仏法を学び行ずることができるとすれば、それはそのまま、他人の悩み・苦しみや、その罪障ということがわかることであり、本当にその人を気の毒に思うことがなければ、慈悲は折伏の心も生まれてく

るはずがありません。学会流のような自身の功德ほしさの爲めの会員獲得は、折伏などではなく、エゴに他ならないのです。

大聖人には、たとえ自分の子供を亡くされていなくても、母の悲しみが身にしみてわかったのであり、それをもって母に接せられたことは、そのまま法華經の行者としての振る舞いであったでしょうし、母尼も大聖人からこのようなお手紙をいただいたことによって、悲しみを共にし、分かち合う師匠の心にどれほど救われた思いがしたでしょうか。

大聖人のお手紙の最後には、
「日蓮は所らうのゆへに、人々の御文の御返事も申さず候ひつがに、この事はあまりになげかしく候へば、ふで(筆)をとりて候ぞ。」(全集一五八四頁)

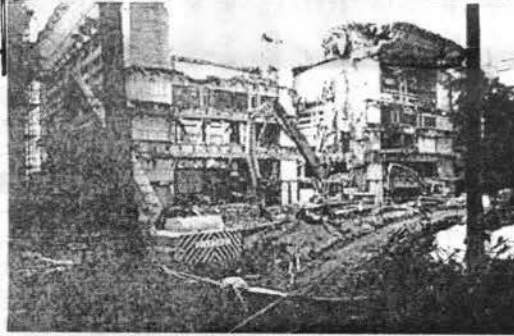
とあって、ご自身のお体すら覚束ない病床にあって思わず筆をとられたそのお心は、まったく己れを忘れて母尼と悲しみを共にする者としての慈愛に満ちあふれていたものと思うのであります。

また、こうした御消息に接して、深い慈悲に裏づけられた、真に人情味のある、豊かな精神、熱き魂にふれるにつけ、ひるがえって無味乾燥の砂漠のような不人情の時代に生きる我われ現代人が、失ってしまったものの大きさに思いをいたさなくてはならないと思います。とともに法華經の信仰の中に、かぎりなく豊かな宝が埋まっていることに思いが及ぶのであります。

どうぞ、折々に大聖人のご消息に触れていただいて、自身に宛てられたものとして、その書かれた状況などを想像しつつ、身に引き当てて拝して頂きたく思うのであります。

南無妙法蓮華經

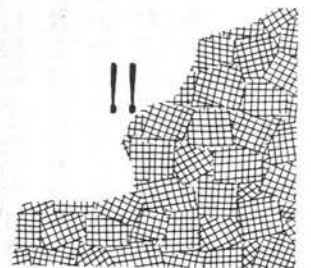
(了)



正本堂も、大客殿のような無惨な姿をさらすことになる

突如、戒壇の大御本尊を新奉安殿に遷座

正本堂が取り壊しへ！！



日蓮正宗総本山大石寺の正本堂にご安置されていた「戒壇の大御本尊」が、時あたかも十日間にわたって行われていた新客殿の落慶法要最終日の四月五日夕刻、突如、かねて改装を終えていた新奉安殿にご遷座されるとともに、正本堂が閉鎖された。また、併せて正本堂の取り壊しも発表された。

この突如の発表は、阿部師の言を借りれば、

「池田創価学会の謗法を検証するとともに、総本山における仏法を歪曲した謗法の遺物を徹底して駆逐し、もって破邪顕正の洋々たる広布の未来を開く」

とその理由づけをしているが、要は憎っくき謗法の池田大作創価学会名誉会長が願主となっている正本堂を使いたくないということだ。

既に、正本堂に代わる建物としての『奉安堂』構想も持ち上がっており、先師日達上人の代に建立された二千年の耐久性を誇るといわれた正本堂は、昭和四十七年十月の落慶からわずか二十六年という短期間で閉鎖され、建物自体も五月から二カ年をかけて解体することが既に公告されている。ちなみに、解体に要する費用は四十八億余といわれている。

この突如の暴挙に対する宗内僧俗の動揺は極めて大きく、ある人は「御本尊様がお怒りになります。僕は覚悟出来ていません。

地獄に行っても良いと思います。」とまで、悲痛な心情を吐露していた。

この件に関して、乙骨正生氏が『仏教タイムズ』(四月十六日号)にレポートを寄稿されているので、参考のために転載する。

正宗蓮日

「正本堂」取り壊しへ

5月から2年がかりで解体

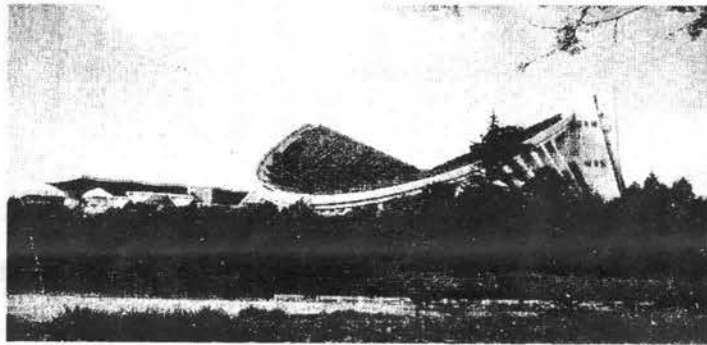
日蓮正宗大本山石寺が、正本堂を解体する意志明らかにした。さき四月五日、宗旨の根本である「戒壇の大御本尊(以下・戒壇本尊)」を奉安殿へと遷座し、正本堂を閉鎖した同本山では、四月八日、主要な境内建物を変更する場合は、信者その他の利害関係人に公告することを定めた「宗教法(法第三十三条)」の規定に基づき、正本堂を解体することを公告した。

公告によれば工期は「平」である池田大作創価学会内外語り、断固、壊し、祖日蓮聖人遷化後、身延山成10年5月から24カ月。長(当時)の発言(S.47・ていこ)ではありません。を寄進した大権威である地解体費の概算は「48億5,10・17」とは裏腹に、三十分(日10・4・6付)翌頭波木井長に「勝法」行門処分について、正本堂が千万円。そして、解体理年を満たす地上から姿教新聞」

由は「用余目的消滅の為」を消すことだった。との秋谷栄二助会長の談、離山し、大石寺を開創した。然の結果に他ならない。

この解体の措置によって、らびに正本堂の解体という、非難を繰り返している。精神に則り、「勝法戒」持し意義は、またした。宗教史、さらには政治史に派における教義・信仰の次、元止まらず、戦後日本のシタとの指摘も可能。きな痕跡を残してきた創価

の池田氏が願主として建立された正本堂に、戒壇本尊をいつまでも安置しておくことは自らの宗教的イデオロギイの喪失に相当する。その意味では、創価学会ならびに池田氏の破門処分について、正本堂が



「私の魂」(池田氏)は26年間で消滅

▲創価学会のシンボルだったのシンボルであり実質だったが、遂に解体へ……
それゆえ池田氏は、側近幹部に対し次のような発言を繰り返して述べている。
①宗教的権威の源泉 「正本堂は宗門にとられないようにしたい」
②世俗的権力の源泉 「正本堂は創価学会の持に他ならなかった。紙数 仏堂だ」
③政界進出の教義的根拠 「正本堂には私の魂が置いたが、日蓮聖人の遺命である」
「一には、正本堂こそ自であることによる宗教的権威の確立」④。三百五十五億田という莫大な金力に氏の本音が露骨なまでに示される銀行界をほじめする、大い。そして、正本堂に立からずか二十六年にしつながら国立戒壇の建てて解体されることになつて、創価学会の政界進出の。その意義は、日蓮正宗唯一の目的であり、政界進出VS創価学会の対立の二輝出の教義的裏付けだった。以上、日本の宗教界、否、日本社会そのもの、換言すれば、正本堂を通じて大きな意味をもつが、宗教的パッションの下、支えられた金と勢力によって、日本の政治、社会を覆しようとした創価学会

レポート
乙骨 正生

洋画を見ると、天氣の良い日に家族そろってペンキ塗りを楽しそうにやっている場面をよく見ます。外国、特に欧米諸国では伝統的に生活スタイルに組み込まれているようです。日本ではそのような伝統的な面はなく、ペンキ塗りはペンキやさんの仕事と決め込んでいる人が多い



ようです。

近頃休日も多くなりつつありますので、ここで頭を切り替えてご自分でやってみてはいかがですか!!。以下そのためのアドバイスを紹介してみましよう。

まず、材料と用具を分けて述べていきます。一般家庭で用いる材料を分けると、

水性塗料と油性塗料の二種類が主に用いられています。水性溶剤（うすめたり刷毛を洗う液）は水、油性の溶剤はシンナー系ペイント薄め液です。水性と油性材料を混ぜることは絶対できません。これは後にも述べますが工法にも関係いたしますので、よく確認しておいて下さい。用材の量（塗布面積）扱い方は缶に必ず明記されていますので、前もって確認しておくことが大切です。

次に色ですが、元色（缶入りのままの色）と調色（色を混ぜ合わせて色を作る）があります。調色の場合は、白または薄い色がベースとなります。この時の注意は一度に色を混ぜるのではなく、ベースの色を別のところに少量取り出し、混合色を少しずつ混ぜながら色を出していきます。思う色が出せた時、初めて配分量を元に材料を作っていきます。完成色は二度と同じ色が作れませんので、少し多めの量を作っておきましょう。

ここで塗る場合の点検を行います。ほこり等を掃除し、水漏れや湿りがないよう完全に乾いた状態にしておきます。水性であれ油性であれ、湿っている面には

接着性が損なわれ、乾いた後から塗面が紙のようにはがれる原因になります。また錆はペーパーや金ブラシ等で取り除いておきましょう。よく網板（トタン等）の錆を取り除いたら、星穴が開いていたということがあります。こんな時はその部分をよくペーパー等で磨いて清掃し、布または紙のガムテープで穴を塞いでおきます。

また、塗り替えの目安（時期）を網板を例にお知らせしましょう。網板波板も新しい時は艶があり、まるで新しい車のようには輝いています。三・四年経つとその輝きも艶も無くなつてきます。五・六年ぐらいでやや茶色がかつた色に変色してきます。少なくともこの辺を目安に塗り替えたいものです。この時期を見逃すことなく塗り替えることにより、寿命がグリーンと延びます。

もし見逃して放置しておきますと、ブツブツとニキビのような肌になってきます。これは網板生地に錆がかなり出ている証拠です。こうなると錆を落としながら塗り替えざるを得なくなり、

話は余分になりますが、純度の高い鉄

は研磨して三十分から四十分ぐらいで酸化、つまり錆が始まるといわれています。新品の網板がなぜ強いかというと、工場で一貫システムに依り原板加工と同時に防錆加工と焼き付け塗装が外気に触れる間もなく製品にされるからです。いずれにせよ、錆から腐り返はあまり期間がありませんので、気をつけましょう。腐つてからのペイントは労多くして実り少ないです。

それともう一つ気をつけなければならぬことは、一年程前にペイントした上から異なった性質のペイントを塗ったために、塗って乾燥した頃に塗り肌が魚の鱗のようになることがよくあります。前述したように塗料は同質でないと、このような現象が起きますので注意して下さい。また下地修整用のパテも同じく水性は水性用、油性には油性用と同質のものを使うのが基本です。コーキング材はどちらも使えますが、変成タイプを使って下さい。

次に塗る場所と耐久力の問題ですが、近頃の水性塗料は、油性と同等の耐久力があります。水性塗料は元もと酸度が

強いので、鉄製品には不適當です。したがって油性がよいでしょう。

また材料の使い分けとして、外壁のモルタル壁とか浴室の壁のように、モルタル仕上げの塗装には水性が塗りよく、特に浴室用と指定している物はかなり強度を持たせており、防カビ材も入っていますので最適といえるでしょう。

なお、鉄製品へのペイントは、その前に錆止め塗料をお勧めします。これも、油と水の種類あり、四・五日乾燥させから上塗りします。

では実際に塗ることにしましょう。先ず刷毛を十分に塗料になじませます。そしてタテ・ヨコどちらかに決めて塗っていきますが、上手に塗るにはヨコの数回塗れば、その塗った上を今度はタテに刷毛を運びます。ちようど「三」の字に「川」の字が重なるように塗ります。こうすることにより刷毛が軽く動き、塗りムラもなく塗り残しも防げます。平らで広い所はローラーを使うのもよいでしょう。但し、この時は角のローラーが使えない所は、先に刷毛で処理しておきます。また塗ってはいけない所も先にテープ

グをしておきましょう。

なお、ペイント工事は、高い所から塗っていくのが一般的です。そして取付物は可能な限り取り外し、突起物等はナイロン袋等をかぶせるのもよいでしょう。外壁等、モルタル仕上げで表面がブツブツの面はペイントがしにくいものです。この時はローラー塗装するか刷毛で叩くように塗りつぶしていきます。但し、モルタル壁は水性ペイントが最適であることは、前に述べたとおりです。

高所の場合は、体が不安定にならないように、足場を確保することが肝要です。塗装が済んだ後は、次回ペイント工事のために、水性か油性かを覚えておきましょう。

最後に、木製品等のニス塗装ですが、すでに色が塗られている物にはクリアー（無着色の半透明）が艶出し用にいいでしょう。白木ものには着色ニスがありますので、それが適当です。ニスの性質として、ほこりと湿気を嫌いますので、乾燥した日にはこりの無い所で塗るのがコツです。

今回は、「水回りと湿気」の予定です。

そのむかし、八幡太郎義家が奥州征伐にのぞみ、三浦為繼と鎌倉権五郎とが先陣争いをした。従兄弟にあたる二人は勇猛果敢に馬を駆け、権五郎は右目を敵の矢に射抜かれたが、ひるまず敵をなぎたおして帰陣した。

「手負うたわい」と吐き捨てる権五郎を為繼が寝かせ、矢を引き抜くべく片頬に足をかけ踏ん張る途端に、「ツラあ踏むな」と叫んだ権五郎が、下から刀で斬りはらった。

矢に当たって死ぬるは武士の本望なれど、面を踏まれる恥は堪忍ならぬのだ。為繼は謝り、今度は抱きかかえて、矢を引き抜いたという。その間、権五郎は痛いと何とも、一言も声をあげなかつた。鎌倉武士の概念を象徴するような話で、死後、極楽寺坂には「五霊社鎌倉権五郎景政」なる石碑が建ち、武士の誉れとして今も残されている。

五（御）霊とは死霊の意味で、特に悲運のうちに亡くなった人の靈魂を指す。だが、権五郎景政の御霊は悲運どころか、坂東武者の鏡として祭られた、いかにも靈験あらたかそうな御霊社である。

右の話は司馬遼太郎の「街道をゆく・三浦半島記」の要旨である。これを読みながら「種々御振舞御書」の一節を思い出し、合点のいったことがある。

天地つかの間

〔その二十九〕

成田 詳道

九月十二日の夜陰にまぎれ、竜の口の刑場に連れ出された大聖人は、鶴ヶ岡八幡宮の社前で八幡大菩薩に、法華經の行者を守護せぬ怠慢を諫暁した。つぎに由比ヶ浜にさしかかり、再び足を止めた。そこは権五郎御霊の石碑の前だった。

熊王なる童子を呼び寄せ、四条金吾のもとへ走らせた。やがて息せき切って駆けつけた四条金吾が、馬のくつわにすがりつつ、斬首の場とおぼしき所へ近づくと、感極まって泣き伏した。

その時の大聖人のお言葉が「不覚の殿原かな、これほどの悦びをば笑えかし、いかに約束をば違へらるるぞ」である。

おそれながら、この意味を推測する。武士とは公家の飼犬である。それほど身分の賤しい者でも、恥ずかしめを受ければ、一身を投げ出してこれを濯いだではないか。権五郎の石碑はその真面目の顕彰である。

日蓮は武士以下の身分、旃陀羅の子ではある。が、自分にだって一身をなげうって護らねばならぬものがある。それが一切衆生を救済する法華經の弘通である。今夜、自分はいたずらに身を滅ぼす訳じやない、法華經弘通の意志を曲げざるによつて、殺されるのだから本望である。

さあ、法華經の行者の覚悟のほどを、しかと眼に焼きつけて、帰ったならば主人にも伝え、門弟檀越にも披露せよ。

殺さんとする兵が武士なら、これを悲嘆する四条金吾も武士である。その武士どもを前にして、

「命と申す財にすぎて候財は候はず」と教えられた大聖人が、命以上に大事なものの有ることを、文字通り命を投げ出して教訓するのに、権五郎景政の石碑は、これ以上ない当意即妙の存在として、目に止まったのであろう。（源立寺執事）



各地区ごとにご住職を囲んで記念撮影（大阪地区）

「生涯正信を求めよう」をテーマに

箕面・高槻・大阪合同地区総会を開催

お彼岸も過ぎて、暖かさ以上に暑さを感じた三月二十九日、午後一時より、最後の合同地区総会が開かれた。司会は高石市の森秀之氏、テーマを「生涯正信を求めよう」と題した総会は、司会の熱情あふれる開会の辞で始まった。

所感発表では藤岡、黒岩、寺川（以上別掲）、布江（次号掲載）の四氏が、マイクをにぎり、それぞれ聴衆の反応を確認するかのように語られた。内容はそれぞれ自分の経験、心情などを真剣に吐露したもので、この日の総会の根幹となり、参加者はみな耳目を集めて聞き入った。

予定時間は大幅に延長され、すべてを終了した時には、三時五十分を回っていたが、今後の信心姿勢に、また宅お講の議題としても、おおいなる提示をした総会であった。

なお、それぞれの合同地区総会は、カセ



正信を求めることの大切さが発表された

ットテープに録音し、書庫戸棚に保管し、貸し出しをいたします。欠席された方や、他地区の総会のようにすを聞きたい方は、ご利用下さい。

私は姉夫婦の勧めで、昭和五十九年二月に創価学会に入りました。それが日蓮正宗との出会いです。

最初、学会の活動に馴染めなく、矛盾を感じながらも勤行

だけはしようと思
って、朝夕一時間
ぐらいかかる、た

だと思い、日蓮正宗はすごいと実感しまし
た。それから、学会は好きではないけど、
やっぱり活動もしないとだめかなあ、と思
いだした頃、学会以外に日蓮正宗があると
聞き、早速退会しました。
学会活動をしないで日蓮正宗を信仰でき
るということで、吹田の法源院に入講しま
した。



寺川春美さん

自分から求める信心を

箕面地区 寺川春美

だ読むだけの勤行
でしたが続けまし
た。

一年ぐらい過ぎ

た頃、なんだかウキウキしている自身に気が付いたのです。別に特別良いことがあったわけでもないのに、毎日が楽しいのです。これが宗教なんだ、これが日蓮正宗なん

法源院には、公私
ともに尊敬している、
私の勤務先の社長が
居られました。私が
が入講して二年ぐら
いに、教義がちよっ
とおかしいと言われ、
法源院から源立寺に
移られました。私は
教義があまり分から

ないので、そのまま残ったのですが、徐々に私的なことに口出しされるようになり、最後には、会社を辞めないと信仰は続けられないと言われました。結局、会社は辞めないでお寺を辞めました。

そして、私も源立寺に平成三年入講させていただきました。

「ここでは、自分から進んで求めていか

なければ、誰も何も言わないよ」と教えてもらい、私はこれが本当の信仰だと思えました。人に押しつけられてするのは、本当の信心ではないと思います。

月日が流れるのは早いもので、もう七年になります。自分から求めていくことは難しく、月に一回はお寺に参詣するように努めるのですが、たまにパスしてしまいます。

でも、昨年総会の司会をさせてもらってから、急にお寺が身近に感じられるようになりました。お寺に居られる皆さんの暖かみを感じるからでしょうか。これからは、もっと自分から求める信心をしたいと思えます。教義も少しずつ勉強したいと思っていますので、ご指導よろしく願います。

最後に、日蓮正宗に縁させていただいて本当に感謝しております。

【恵日俳壇】

千年の 掌を拡げる如し 白目連
白目連 天を仰いで 咲き競ふ

〔宮下留代〕



分の罪障に気がつくわけですが、自身に内在する罪障は、自覚し懺悔した時に消滅することが出来るのです。」

とのこと、目の前が明るくなりました。息子が私に罪障消滅の修行をさせてくれているのだと悟ることができ、唱題にも力がこもるようになり、「息子の方から来て下さい、と言ってもらえる親になれますように。」と、祈りを込めました。

何ヶ月か膠着状態が続き、いつそのような時が訪れるのか、予想もできませんでしたが、昨年六月、息子から「去年（平成八年）八月から血尿が出ていたが、最近やつと原因がわかり、入院して手術するから来て欲しい。」と電話があり、びつくりすると同時に、何ともいえない不思議な気がいたしました。

病院で一年半ぶりに顔を見合わせた時、今までのわだかまりが嘘のようでした。本人は病気とも思えぬ元気な顔色で、手術に対する心構えもしっかりしているように見えました。私は、自分の手術の時の体験も交え、ご住職からも「先ずお題目を唱えさせるように」とご指導いただいたおりましたので、心の中で唱題するよう勧めました。兎に角あれほど拒否されておりましたの

に、病気がきっかけとはいえ、二ヶ月も息子のところで暮らすことになったのです。

手術後は、悪い部分は取り除いたので治つておりますのに、傷口が中々くつつかず心配いたしました。が、仕事熱心な息子は、退院したらすぐにも出社するつもりでおりましたので、ゆつくり病院にいられたことは、功德であつたと私は思っております。



藤岡眞智子さん

この機会に信心のことをしっかりと話しておこうと思ひ、大聖人様のご生涯のこと、私たちの入信のいきさつ等、十数枚の便箋に書き残して参りました。法統相続につきましては、いつも気にはしておりましたが、毎年お正月に帰省した時、元旦に親子三人で勤行唱題するということは素直に感じてくれていましたので、どこかのんびり構えておりました。この度のごことで、話す機会

を得ましたので、今は多少反発する態度が見えますが、いつか花開き実りの時が来ると信じております。

その後も体調のことなど心配なことばかりですが、元旦には息子が新年の挨拶の電話をくれ、元気な声が聞け不安が打ち消されました。

ようやく最近になって、不安を持つということについて、たゆむ心なく唱題を継続していけば、必ず道は切り開かれていく、悩み苦しみこそが、真剣な唱題への原動力であると思えるようになりました。

最後に、私がいつも有り難く思っているご文を二つ紹介します。

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与へ給ふ」（「観心本尊抄」全集二四六頁）

「深く信心を発して、日夜朝暮に又懈らず磨くべし。何様にしか磨くべき、只南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを、是をみがくとは云ふなり。」

（「一生成仏抄」全集三八四頁）
妙法を受持できたことに感謝し、また、命終るまで修行の日々であると自覚して歩んで参りたいと思っております。（要旨）

こんにちは。箕面地区檀徒の黒岩と申します。

本日の総会で、お話しさせていただき

となり、私にできるかと戸惑いしましたが、自分なりに法燈相統という

ました。

創価学会の現世利益信仰や、組織中心の誤った信仰に気付かせていただき、正信会では、信仰の目的は成仏にあることや、心の大切さを教えていただきました。大聖人様の仏法を正しく信仰できることを今幸せに感じております。

昭和五十五年三月



黒岩直子さん(左)と馬頭さん

に信心に理解のない夫と結婚し、それから内得信仰を続けられております。一男一女に恵まれて、子供たちはお陰様で源立寺で御授戒を受けることができ、幼い時より御本尊様に縁しております。

い

ります。

少年部の修養会では、菅野ご住職、成田

ご尊師、奥様には大変お世話になり、子供たちにとってかけがえのない楽しい思い出となっております。また、いつも皆さまには、折りにふれ子供たちに暖かく、優しく

接していただき、感謝いたしております。

私は幼い頃より、母から大聖人様の仏法の話をよく聞かされ育ちました。そのお陰で信仰の大切さや、ありがたさはいつの間にか、知らず知らずのうちに少しは身につけていきましたから、日常生活において仏様のお話を子供にしていくことが、大切なことだと思っています。

小さい時は、マンガ『法華経七つの物語』をよく読み聞かせたり、『継命新聞』の「おい君達いっしょに考えてみないか」とか、『地涌の友』の「仏教寓話撰」なども読んで聞かせ、親子共々学ばせていただいております。

お寺の行事の折には、『信仰と作法』の本の中に書かれているところを読み直し、「今日のこの日は、こんな意味があり、大切な日だから」と話し、お寺にお参りしております。

子育ては、楽しみでもありますが、大変なことも多々あり、悩んだり反省したりの繰り返しです。

いつかご住職に、子育てにとって大切なことは、心を育てていくことで、植物を育てていくように、じっくりと気長に育て、

〔所感発表〕

法 統 相 統

箕面地区 黒 岩 直 子

まよろしくお願いいたします。

昭和五十四年九月に創価学会を脱会し、菅野ご住職のご指導のもと、正信会にて、源立寺で信心をさせていただくことになり

ことで、所感を述べさせていただきます。どうぞ皆さま

やがて立派な人間と育っていくよう願って
いくことだ、と教えていただいたことがあ
ります。

まだまだ未熟な私たちですが、正直に生
き、少しでも仏法のお役に立てる人となれ
るようしっかりと御本尊様を持つて、罪障
消滅と自他共々の成仏を願って、明るく頑
張っていきたく思います。

今後とも、菅野ご住職、成田ご尊師、皆
さま、よろしくご指導下さいますようお願い
申し上げます。

「寂日房御書」に、
「夫れ人身をうくる事はまれなるなり。
已にまれなる人身をうけたり。又あひが
たきは仏法、是も又あへり。同じ仏法の
中にも法華経の題目にあひたてまつる。
結句題目の行者となれり。まことにまこ
とに過去十萬億の諸仏を供養する者な
り。」(全集九〇二頁)

とあります。このご文にふれる度に、大聖
人様の仏法に巡り会えたことを喜び、心の
財を積んでいけるよう、信心に精進してい
きたく思います。

今日は、つたない私の話を聞いていただ
きありがとうございます。

【全総会における住職指導】

《不滅の財》

〔崇峻天皇御書〕全集一一七三頁〕

この周辺地域でも震災以前と以後とで
は、ずいぶんと変化がありました。パブル
の頃には大変に羽振りがよくて、マンショ
ンをいくつも購入したり、株の買い占めな
どをして、大きな蓄財をした人が居りまし
た。ところが、震災の後でいつの間にか、
姿の見えなくなってしまう人も居りま
す。また逆に、地道に堅実な努力をしてき
た方が、安定した生活の基盤を作り上げた
方もおります。しかし、いづれにしても、
世間で騒がれる財の中身とは、財産や名声
などであることが多く、これらはちよつと
した事故や病氣、世間の変化で崩れてしま
うもので、みな盛者必衰の理を免れません。
では本当の宝とは何かと考えてみますと、
信仰の宝なのです。信心の財はみな成仏の
要因となり、終生この身を離れることがあ
りません。どうぞ人生で本当に必要なもの
は法華経の宝だということを、肝に銘じて

信仰して下さい。

《流水腐らず》

〔上野殿御返事〕全集一五四四頁〕

水のごとき信心とは、御書に仰せのごと
く、よくご存じだと思えます。でもこの水
もほつておけば腐って虫がわきます。水が
腐らないためには流れていなければなりま
せん。だから水のごとく信ずるとは、止ま
ることなく流れ続けるといことです。人
生も同じで、常に新しい風を送り込んで、
エネルギーを燃焼させる必要があります。
派手でなくとも、勢いが強くなくともいい
ですから、常に停止することなく、現状に
あまえず、一歩上を目指して努力する、不
断の信仰を心がけるようにして下さい。

- ▼ご本尊根本・信心第一の生活を。
- ▼ご本尊様のお給仕・勤行・お講
参詣は確実に実践しよう。
- ▼仏縁を大事に、慈悲・利他の折伏
を。

まどさんは戦後を代表する童謡「ぞうさん」の生みの親である。その他にも「おさるのゆうびん」など、この詩人によって生み出された作品は人気が高い。まど・みちおというのが正式な筆名だが、親しい人はその人がらに惹かれて「まどさん」と呼んでいる。▼本書は、まどさんの語ったものを自伝風にまとめた小説である。もともと人に会うのも、まして自分の生い立ちを語るなど大の苦手のまどさんと著者との橋渡しをするのが、「ぞうさん」であった。▼「ぞうさん」の詩に心引かれた著者は、「ぞうさん」が戦後を代表する童謡であることを「童謡のまわり ぞうさん」としてまとめ、昭和五十三年に発表していた。資料も長年あためていたものであり、内容にもそれなりの自信をもっていた。そしていつか機会があれば直接本人から感想を聞いてみたい、そんな思いを懐いていた著者に、その後何年かしてようやくチャンスが廻ってきた。▼ところがまどさんからは、著者の立論を真っ向から否定する言葉が出てくるばかりで、「ぞうさん」を戦後童謡の傑作とみた著者の立論は見事に土台から崩れ去っていく。▼あためていた資料、その新聞の切り抜きが創作であったというシヨッキングなことを聞き出したのもそれから間もなくのことだ。こうしてまどさんの語りから「ぞうさん」そのものが、著者が想像していた世界とはもつと根源的に違う世界から生ま

読書案内

松田銘道



阪田寛夫著
『まどさん』

ちくま文庫
五八〇円

れていたということに、ようやく気付き始める。▼「ぞうさんへ」の傾倒が、こうしてまどさんの生い立ちそのものを聞き出すことになっていくのだが、それは聞き書きのみにとどまらず、その後もまどさんを知る人々からの聞き取り、未公開の日誌を読む、埋もれていた戦前の詩・散文の収集、青少年期を過ごした台湾への調査等に、さらに三年の歳月をかけて本書は誕生した。▼よって本書には、著者自身もつとも衝撃を受け、そして求め続けたまどさんの「ぞうさん」へのほんとうの思いが綴られている。まどさんはまず童謡への想いをこう語る。▼「童謡はどんな受けとり方をされてもいいのだが、その歌がうけとってもらいたがっているようにうけとってほしい」▼童謡をこころから大切にしてきた人の言葉だ。そしてまどさん自身は、「ぞうさん」はたぶんこういう風にうけとってもらいたがっているのではと考えている。▼「もし世界にゾウがたつたひとりだけで、お前は片輪だといわれたらしよげたでしょう。でも、一番好きなかあさんも長いよと誇りを持って言えるのは、ゾウがゾウとして生かされているのがすばらしいと思ってるから」▼自分が自分に生まれてすばらしい、ということテーマとしている詩が自分の作品には多い、というのがまどさんの自作への自己診断。まさに「ぞうさん」はその自己診断通りの代表作品である。(正覚院主管)

恵日だより



法華講入講式を終えて記念撮影

法華講入講式

四月五日（日）午前十時

例年のとおり、講中勤行会の後に、今年度の入講式が開催され、四名の方が入講されました。新入講者を代表して、藤田忠省さんが挨拶（別掲）をされました。

新入講者の皆さんには、努めてお寺や法華講の行事に参加され、一日も早く講中にとけ込み、異体同心の信心修行を心がけて下さい。

なお当日、仕事の都合で出席できなかった方には、後日に入講書類を送付いたします。

お知らせ・ご案内

◎法華講全国大会について

来る五月十七日（日）午後一時より、千葉県文化会館で開催される法華講全国大会の申し込み受付は、四月十三日をもって定員二十五名が集まり、募集は締め切りました。交通手段は、大阪↓羽田間

は飛行機、羽田↓千葉間はJR電車を使用します。

すでに早期割引で一括購入したチケットは、源立寺受付に保管してあります。未入手の方は、早急に代金引き換えのうえ、お受け取り下さい。

個人行動で参加される方は、会場周辺の地図と、参加者名簿、源立寺名札を、お寺に用意してあります。お講までにお受け取り下さい。

なお、聖跡研修を希望された方が若干名おりましたが、人数や日程の調整がつかず、今回は中止となりました。

【交通手段】

・往路⇨JAL 102便（伊丹8:50発

↓羽田9:50着）

・復路⇨JAS 209便（羽田7:25発

↓伊丹8:25着）

・往復⇨モノレール/JR山手・総武線

【訃報】

（池田市）

浄心院法栄信士 四月九日寂

俗名 津山栄造之霊 行年 六十三歳

謹んでご冥福をお祈りします。



入講の挨拶をされる藤田さん

〔入講者代表挨拶〕

ご指導を賜りながら

蛭池地区 藤田 忠省



この度、源立寺法華講に入講させて頂きました、藤田忠省と申します。私は生まれながらに、宗教とは無縁の生活をしておりましたので、仏の教えなどはまったく知りませんでした。

会社では経理の仕事を担当しており、仕事は多忙をきわめ自身の判断は、常に会社の財務的事故につながるがあります。責任者として自分の決定した事項に、

自信がもてなかつたり、社長に進言するにしても、個人感情が入りすぎていないか否か、後でずいぶんと考え込むこともありました。

入信するきっかけとなりましたのは、そうした時期で、以前から知り合いです、法華講の会計を担当する太田さんのお話を聞き、仏智というものにも備わるのであるなら、自分自身が向上できるのであれば、と思うようになりました。

今まで経験した一般生活との違いとか、自分にどこまで、どれだけ信心が出来るのか、ということを考えて、口で説明するよりも、一つでも実行することが信心であると考え、入信に踏み切りました。

とにかく去年の五月に、御受戒というものを、ご住職様からしてもらい、毎日かかってくる太田さんからの「勤行しているか」の電話に励まされ、足の痛いのを我慢して、中途半端ではありませんでしたが、勤行を続けました。

それから半年ほどした時に、お寺でお会式という行事があり、その頃から五座三座の勤行ができるようになり、今年一月に

本尊様を頂き、今日に至りました。その間、一番嬉しかったことは「会社のイライラが消えた」ことでした。

私自身、先輩なしでの信心向上は望めませんので、法華講に入講した以上、ご住職や先輩の皆様方のご指導を賜りながら、頑張っていきたいと思えますので、よろしくお願ひ致します。

以上、私の経験をお話して、新入講者の挨拶に代えさせて頂きます。

【皐月詠草】



〔大正八年〕

〔橋本義一〕

違約せし われを杏の 樹に縛り

叱りてくれし 母の涙よ

〔大正十年〕

西瓜二ヶ 肩にふり分け 生駒山に

汗をふきふき 訪いくれし母

〔橋本 圓子〕

稚児われを 手放し難く 三日三晩

泣き明かしきと 乳母は語りぬ

みれん断ち 実母に返すが 此の稚児の

幸せならんと 誇めし乳母

五月の行事

- 一日(金) 午後二時 お経日
- 三日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会
- 七日(木) 午後二時 広基寺お講
- 十日(日) 午後一時 お講・役員会
- 十三日(水) 午後一時 お講
- 十七日(日) 法華講全国大会(千葉県文化会館)
- 二十四日(日) 午後二時 法華経講義

※五月一日の継命新聞の発送は
『旭丘・緑丘』が担当地区です

今月の宅お講

- 二十日(水) 午後一時半 緑丘地区(児玉融一宅)
- 二十三日(土) 午後一時半 庄内地区(久保八千代宅)
- 三十日(土) 午後一時半 蛭池地区(太田勲宅)
- ※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします
締め切りは、毎月二十日です。

恵日

平成十年五月号 通巻三十九号
平成十年五月一日発行

編集兼
発行人 菅野憲道
発行 恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内
TEL (〇七二七) 五二一三三三五
E-Mail: genn@wombat.or.jp
BBS: P4H05170 (NIPTTY) BMC92733 (PCVAN)